

社会主義中国の宗教政策

——抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その6

大澤 邦 由

本稿は羅竹風主編『中国社会主义時期の宗教問題』（上海社会科学院出版社、一九八七年）第五章「宗教と社会主义社会の相互協調の問題」の翻訳である。

本書はもとと永井政之先生により、先生が在外研究員として上海社会科学院に滞在していた一九八八年から翻訳が始められたものであり、その後、先生の学部授業での講読にて引き続き読まれ、以下の論文が発表された。

永井政之「社会主義中国の宗教政策」抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』

『駒澤大學佛教學部研究紀要』四七、一九八九年三月

永井政之「社会主義中国の宗教政策」抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その2」

『駒澤大學佛教學部研究紀要』四八、一九九〇年三月

永井政之「社会主義中国の宗教政策」抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その3」

『駒澤大學佛教學部研究紀要』五〇、一九九二年三月

永井政之「社会主義中国の宗教政策」抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その4」

『駒澤大學佛教學部研究紀要』五一、一九九三年三月

永井政之「社会主義中国の宗教政策」抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その5」

『駒澤大學佛教學部研究紀要』五二、一九九四年三月

それぞれの翻訳部分を本書の目次と対照すると次のようになる。

『中国社会主義時期的宗教問題』の目次	
羅竹風「這本書の由来——《中国社会主義時期的宗教問題》前言」	〔その1〕
第一章 緒論	〔その1〕
第二章 我国宗教の歴史概況と特点	その3
第三章 建国以後宗教狀況的根本変化	その4
第四章 宗教長期存在的原因	その5
第五章 宗教和社会主義社会相協調的問題	未翻訳
第六章 宗教信仰自由政策	未翻訳
第七章 結束語	未翻訳
附録	
邳県去来	〔その1〕
關於福建省仏教寺廟開展生産労働情況調查	〔その1〕
部分仏教青年的信教原因初析	〔その1〕
四川青城山道教現狀	その2
上海某街道退休職工信仰基督教情況的調查	その2
長白山下の教会	その2
青浦県漁民教徒宗教信仰狀況初探	その2
新疆伊斯蘭教与我国社会主義实践相適應的問題	その4
從某地基督教的發展看宗教生長の土壤	その4
後記	未翻訳

日本語発表論文の論題としては「抄訳」と名を冠するものの、それぞれの内容は全訳に近い。ただし、本書の第五章、第六章、第七章及び後記に関しては翻訳されずに残されている。このことに鑑みて、筆者は日本語翻訳の最終稿から三〇年弱の時を隔てて、本書を全訳すべく永井先生のご承認を賜り、第五章以下の部分の翻訳を行っていく予定である。その一部が本稿である。

羅竹風主編『中国社会主義時期的宗教問題』とは、「新中国」成立後、特に鄧小平の指導体制下にて提起された「改革開放」（一九七八年十一月、共産党第十一期三中全会にて提出）路線以降の政治環境下における宗教の実情と理想及び社会との関係等の諸問題を、上海社会科学学院という政府系シンクタンクの共同研究により、実地調査を行ったうえで示されたものである。本書の性格についての詳細は「その1」の冒頭の文章および同論所収の羅竹風「這本書由來——《中国社会主義時期的宗教問題》前言」を参照されたい。

本書の刊行から現在に至るまで下ること三六年、四半世紀を夙に過ぎていく。この間、国家の中央指導者は数度にわたって交代し、「その2」に記されることに代表されるような社会的に大きな出来事もあった。中国各地では、「少数民族」居住地域の例に見られるように、依然として宗教に関係する軋轢が起きているとも聞く。また、そのような現代の中国における政治と宗教との関係については、末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』（平河出版社、一九九六年）や卓新平著・三瀆正道監訳『現代中国と宗教の役割——グローバル化時代への対応』（科学出版社東京、二〇二〇年）等に詳細に紹介されている。これらの点から見れば、当然、四半世紀以上を経た現在において本書を翻訳する意義はどこにあるのかという疑問が投げかけられるであろう。

これに対して筆者は、主として次のような観点から本書の翻訳は現代においても十分に意義を持つと考える。第一に、開放政策以後の中国における宗教政策は、少なくとも漢地の仏教を中心として眺めた場合、政府の宗教信仰自由の政策を堅持していると見られ、本書が示す基本的な構造からの大幅な変更は行われていない。また、仏教もそのような政治環境下にあつて、着実に復興を果たしてきたように見られる。つまり、政治的な規範あるいは構造レベルにおいて本書の刊行された時期と現代との間において大きな違いはないといつてよいと思われるのである。第二に、末木文美士前掲書第一章第二節「現代中国の宗教政策」でも本書を参考文献の一つとして掲げ、なおかつ本書を評価して、「各地の宗教に対する実態調査を踏まえ、この立場（筆者注・マルクス主義と宗教の協調論的立場）から宗教と社会主義の問題を

論じた好著である」（七九頁）と述べている。

その他に、本書が有する性格に着目すれば、文化大革命の収束から一〇年ほどしか経ていない時期に記されたものであることは、本書の持つ価値の重要な要素であるように思われる。確かに、経済発展が目まぐるしい今日の社会から見れば、本書には隔世の感のある表現も含まれている。しかし本書は、文化大革命を経験した人たちが、アヘン論のように宗教が否定されがちな社会主義的政治体制において、宗教がいかに社会的に存立し得るかという命題について、ある種の熱気を込めて記したものである。その行間からは当時の宗教を取り巻く社会状況を感じ取ることができる。その意味において本書の有する理論と理想とは大きな意義を有していると思われることができる。

今回の翻訳部分である「第五章 宗教和社会主義社会相協調的問題」は宗教と社会主義社会は相互的に協調関係を保つことは可能であり、またそうすべきであるとの立場から、理論と実地調査をもとに、関係する種々の問題について記されたものであり、「第一節 協調的根拠和含義」、「第二節 協調的条件和表現」、「第三節 不断克服不协调现象」の三節から成る。第一節では『マルクス・エンゲルス全集』や周恩来の言葉を引用して社会主義社会と宗教との協調論の理論を示す。第二節では相互協調の条件として宗教側、国家体制側の二つの方面からその条件と具体的な事例を論ずる。第三節では宗教が社会的に問題となった「非協調的」事例を挙げつつそれへの対処策を提示している。

なお、以下の訳文は永井政之先生の校閲をいただいたものであり、ここに謝意を捧げたい。

第五章 宗教と社会主義社会の相互協調の問題

本書の第三章ですでに述べたように、かつて全国解放の前後、宗教内の帝国主義勢力や反動分子は虚説を流布し、一部の宗教徒をそそのかして共産党や人民政府の宗教政策に対して次のような疑いを抱かせた。宗教は社会主義と共存できるのか。宗教徒は社会主義建設のために努力すべきなのか。一方、マルクス主義者の一部もまた、マルクス主義的世界観と宗教的世界観の対立を強調し、歴史上の宗教のマイナス面の影響を強調して、宗教は社会主義を建設する上での障害であると見なした。これらにより、宗教と社会主義社会の関係は、様々な側面から注目される問題となった。三〇数年来の実践における成功と失敗、両面の経験は、宗教と社会主義が互いに協調しあうことは、必要だというばかりで

なく、可能であるということを示した。マルクス主義の基本原理を用いて、科学的にこの現象を論証することは、社会主義時代の宗教を正確に認識し、それに対応するための重要な課題となった。

第一節 協調の根拠と意味

人類の歴史においては、これまで数多くの宗教が出現した。それらのうち、あるものは現在まで生き残り、あるものは早くに消え去り、あるものは一つの地域、あるいは一つの民族の宗教から世界宗教へと変化する一方で、あるものはわずかに史料や考古の遺跡の中のみに残っている。その原因を探求すると、重要なことの一つは、宗教自身が社会発展の要求に適応できたか、社会の絶え間ない変化にしたがって、その教義や組織や儀式などの内容を絶えず調整して、社会生活の中で宗教的な作用を持続的に發揮できたか、ということである。

キリスト教を例にすれば、まさにエンゲルスが「キリスト教は、どの大きな革命運動もそうであったように、大衆によつてつくられたものである」（『黙示録』、大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』第二一巻、大月書店、一九七一年、一〇頁）と指摘する通りである。紀元一世紀、ユダヤ民族の奴隷や貧民は、奴隷制度やローマ統治者に対して、激しい階級的憎悪を抱いており、幾度もの決起の失敗の後、絶望の境地に陥った。このような歴史的な情勢に適応して、キリスト教は、当時のその他の宗教宗派に勝利し、ユダヤ教の一部の内容を継承しながら次第に発展していった。当初、統治階級はキリスト教を弾圧したが、その後には転じて利用するようになり、それをローマ帝国の国教とした。「中世においてキリスト教は、封建制度が発達するのと同じよう歩調で封建制に照応した宗教となり、この制度に照応した封建的位階制度をもっていた。」（『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』、大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』第二一巻、大月書店、一九七一年、三〇九頁）

一三世紀から一七世紀にかけて、資本主義的生産関係の萌芽と発展にともない、市民階級や都市の人民、及び彼らとともに暴動に参加した農民たちは、思想領域におけるカトリック教会の独占的地位を解除するよう要求した。彼らが宗教という旗の下で行った闘争や当時のあらゆる宗教改革運動はすべて、「古い神学的な世界観を、変化した経済的諸条件と新しい階級の生活状態に適合させようとして再三試みた企てにほかならない」（『法曹社会主義』、大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』第二一巻、大月書店、一九七一年、四九五頁）ものであった。

さらにキリスト教の「平等」という教義から述べれば、初期には「キリスト教はすべての人間についてただ一つの平等、すなわち、平等に原罪を担っているという平等しか認めなかった。これは、奴隷と抑圧された者との宗教としてのキリスト教の性格にまつたくふさわしいことであつた。」（「オイゲン・デューリング氏の科学の変革（反デューリング論）」、大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』第二〇巻、大月書店、一九六八年、一〇八頁）しかし、後に奴隷主や地主や資産階級は、天国の宣揚という「平等」を利用して搾取という罪悪を覆い隠し、被搾取者に対し「平等」に天国に赴くという幻想を用いて、現実生活での不平等という苦難を甘んじて受け入れさせた。

階級社会の中では、各階級には、それぞれ異なった経済的地位や政治的利益、社会的要求が存在するが、それでも各階級の人々は同一の宗教を信仰し、同一の信仰の信者となりえる。したがって、各階級の信者が当該宗教に対していかに社会に適応したかという問題には、それぞれの見解が存在する。

中国の道教を例にすると、道教が後漢中葉に主に民間において流行したことには、大多数の農民階級と下層知識人の利益や要求が反映している。すなわち、政治上の平等、経済上の均衡、及び思想上の儒家からの独立という傾向である。このことにより、初期の道教は、自然と当時の農民階級や下層知識人の利益に適応すると同時に、農民の蜂起に利用されもした。しかし、統治階級からは大逆非道と捉えられたことにより、最終的には抑圧された。魏晉以降、統治階級は一部の道教徒を養成して、道教の教義を次第に綱常名教の観念と結合させ、道教を中国の封建統治階級の利益に適応し、かつそれに利用される宗教へと改造させた。

このような一連の変化の過程から示されるのは、階級社会における宗教の社会への適応という問題はつまるところ、宗教と特定の階級の利益が相互に適応するという問題にほかならないことである。我が国の太平天国による革命は準備の段階において、「普天之下皆兄弟」、「天下一家、共享太平」などの主張を打ち出して、宗教的外見を有する政治、経済的な平等思想を用いて群衆を動員し、清王朝の統治を覆した。目下、国際情勢は混沌としており、第三世界が民族解放を獲得するための闘争は、風雲の如く巻き起こっている。このような情勢に適応して、新しい宗教セクトや新しい神学思想が絶えず出現し、それぞれの民族のそれぞれの階級の利益のために動いている。このように、歴史と現実から見えることは、宗教とは決して固定的なものではなく、社会の発展や変化に適応する中で、絶えず変化するものだとということである。

我が国の宗教を眺めれば、社会主義時代に入って以降、搾取制度や搾取階級の消滅にもなつて、社会状況や群衆の精神状態は大きく変化し、宗教に存在した階級の根源はすでに消失した。また、新たな宗教の思想や組織、儀式、戒律等は陸続と出現し、宗教が社会に適応するための根本的变化が、現在も継続的に起こっている。数十年という短い期間のうちに社会主義時代の宗教に社会適応という一連の根本的变化が起こつたのは、絶対的多数の信者が労働者や農民や知識人であつたことに起因する。彼らは社会生活全体において人口比で多数を占める非宗教徒と同じように、社会と国家の主人公である。社会主義の改造や社会主義建設事業の成果、さらに我が国を四つの現代化という高度文明、高度民主の社会主義国家として打ち立てるといふ偉大なる目標は、宗教徒にとつても巨大な鼓舞の力であり、原動力となるものである。社会主義時代の宗教徒は、自身への利益を起点としつつ、この偉大な社会目標にしたがつて、宗教について適応のための調整を行った。同時に自身の信仰生活においても、民族と社会の進歩という目標の実現を信仰内容の一部とし、愛国護法、積極進取を行為における道徳規範とした。これらにより、宗教徒と非宗教徒との関係はある程度、強調できる段階に到達し、我が国の宗教が社会主義時代において社会の人々と協調するための基礎が構築された。

いわゆる協調とは、異なるそれぞれの要素の間における相互の協力を指し示すもので、本来、相互に協調するそれぞれの立場に対して、自らの特徴を放棄するよう求めるといふ意味は含まれない。まさに周恩来が「中国には宗教信仰を有する人と、宗教信仰を有しない人が存在する、……。これら二種類の人々はそれぞれ仲良く共存しなければならない。……宗教を信仰する人と宗教を信仰しない人はみな協力しあうことができる。異なる宗教を信仰する人も協力することができる。これは我ら民族大家族の団結と互助合作にとつてメリットとなる」(「關於我民族政策的幾箇問題」、『周恩来統一戦線文選』、二八七頁)と述べる通りである。宗教と社会主義社会が相互に協調することの具体的な内容は、少なくとも以下の四点を含む。

(一) 宗教徒と非宗教徒は、党の指導のもとで広範な愛国統一戦線を結成し、国家の工業、農業、国防、及び科学技術の現代化を着実に実現し、我が国を高度富裕、高度文明、高度民主の社会主義国家に建設するために奮闘する。

(二) 宗教界は、愛国主義と社会主義という共通の基盤を堅持したうえで、宗教の部分的な思想や信仰、道徳、及び行為を新しい社会の要請に適応させる。宗教徒は、日常生活の中で愛国護法を實踐して、人々のために尽くし、社会に幸福をもたらさんとする。

(三) 宗教界は、宗教学術研究や国際交流などの領域において、自らの専門や特色を發揮することにより、優秀な民族的文化遺産の継承や、社会主義文化の充実化、及び各国人民との友好や、世界平和の維持促進に対して貢献していく。

(四) 党と国家、及び社会全体は、正しく宗教問題に対処し、法律や政策、及び実際の生活において、公民の宗教信仰の自由という権利を尊重し保護する。

協調とは、愛国主義や社会主義を基礎とし、憲法を根拠とするものであつて、唯物主義を標準とするものではなく、宗教を「消滅」させたり、発揚させたりすることを目的とするものではない。観念論から述べれば、社会主義社会には有神論と無神論、唯心論と唯物論という二つの異なる思想体系が存在するが、これは決して奇妙なことではない。なぜならば、それは決して社会主義社会に特有のことではなく、また社会主義時代に終結できるものでもないからである。認識史の観点から述べればこのような差異は宗教の存在と一定の関係がある。しかし、その内容は宗教の範疇をはるかに超えており、あるいは現在の宗教形式が自然に消滅したとしても、このような矛盾はなおも存在し続けるかもしれない。宗教が内包する豊富な内容から見れば、宗教の唯心的世界観は宗教の一つの要素に過ぎず、宗教は他にも信者や宗教組織、及び儀式等の多くの要素から成り立っている。宗教的世界観が社会生活に関係する割合に比すれば、これら世界観以外の内容と社会生活との関係はさらに緊密かつ直接的である。宗教徒個々人の思想から見れば、大多数の人の世界観は複雑な多元的状况を呈しており、一部の宗教徒の世界観には、時にはある種の唯物的要素が含まれる場合もある。ましてや人の世界観や人生観、あるいは政治的姿勢や社会に対する見解は、しばしば複雑な矛盾を抱える。現実生活においては、異なった政治的立場の人に同一の宗教信仰がある場合も、異なる宗教信仰者が共通の政治的立場を有する場合もある。これらの例は我々がしばしば遭遇することである。したがって社会主義時代において、「共産党員のマルクスレーニン主義の認識をあらゆる人に求めることは、あらゆる人々の人生観や世界観を改めるよう求めることと同様に不可能なことである」(『關於我民族政策的幾箇問題』、『周恩来統一戦線文選』四四五頁)。一〇億の人口を有する大国の中で、全人民の世界観を完全に一致させることはできないし、その必要もない。有神、無神の論争を巻き起こすことは害悪をもたらすのみである。

今日、我が国が目指している社会主義の現代化という建設事業は、その理論的基礎としてはマルクス主義があり、弁証法的唯物論と史的唯物論がある。我々の事業を率いる中心的勢力は中国共産党である。中国共産党はマルクス主義の

政党であり、共産党員は唯物主義の無神論者である。宗教は社会主義社会と協調が可能であるか、あるいはいかにして協調を行うかについて検討するのは、当然、唯心と唯物という二種類の異なる思想体系、あるいは世界観が調和可能かということを目指すのではなく、国外の一部の人が吹聴するように、宗教でマルクス主義を補充あるいは代替しようとするのでもない。周恩来がかつて指摘した通りである。「我々はただ希望する。愛国の宗教界の人々が熱く祖国を愛し、自ら進んで社会主義のために尽力し、さらに自ら進んで懸命に学習することを」(同上)。これはつまり、宗教を信仰しない人々は、宗教を信仰する人々とともに、社会主義の建設において互いに協力し、ともに努力することができるということを述べたものである。

第二節 協調の条件と現象

協調とは、協調する双方の相互に関係する問題である。宗教と社会主義社会の協調関係は、宗教がいかに社会主義社会に適応するかという問題であるとともに、国家と社会がいかに宗教に対処するかという問題でもある。

中国の社会主義時代の宗教と社会との協調関係は、中国の宗教と社会の伝統的な関係の特質を有するだけでなく、さらに新時代と旧社会の根本的相違という特質を有する。一面において、宗教徒は中国社会の人口比ではなお少数であり、決して社会の主導的地位には位置しない。他方、社会主義社会には先進的階級と政党という主導者があり、弁証法的唯物論や史的唯物論に基づいて、宗教と社会主義社会が協調することの必然性や可能性、及びその展開の趨勢に対して、人々に科学的かつ客観的認識を提供している。このことにより、協調のための条件の整備が可能となり、自覚的に協調関係を維持することが可能となった。

協調には前提条件を必要とする。三〇年余りの実践に基づけば、我が国の宗教と社会主義社会の協調のための基本的条件は二つの側面がある。

(一) 宗教の側から述べれば、基本的条件は宗教徒の愛国護法であり、全国人民とともに積極的に社会主義の物質文明や精神文明の建設のために努力することである。

宗教が社会主義社会と協調するとは、どのつまり宗教徒が社会主義社会と協調するということである。前述したように、建国初期、大部分の宗教徒は党や社会主義についてまだ熟知しておらず、疑いの目を向けた。しかし、人民革命

の勝利や社会主義改革の完成は、我が国の歴史において重大な社会制度の変革を実現した。宗教徒は各界の人民とともに解放を獲得し、搾取と圧迫の苦難から脱却した。宗教信仰の自由という事実は、反動的なデマを打ち破った。宗教徒は、かつて受けた搾取や迫害、受難によって脱俗的、厭世的態度を有していたが、社会変革の結果、これらの態度は改められた。彼らは、新社会や新中国が人々に幸福をもたらす各種政策を支持している。党の第十一期三中全会の後、政策の重点は社会主義現代化の建設に移行した。中国の特色を有する社会主義社会を建設することは、全国の人民の願望を反映しているのみならず、宗教徒の根本的利益にも合致している。現実生活において宗教徒が実感するメリットは、社会主義への支持という彼らの基本的態度を決定した。

もし、一部の宗教思想が、彼らが追い求める現実の幸福への障害となるのであれば、彼らも自主的に調整を行うだろう。一部の農村の宗教徒には以前、次のような習慣があった。季節に関係なく決められた時間に礼拝する、病気になるでも服薬しない、映画を見ない、ラジオを聞かない、等である。彼らはこのように行動することが敬虔なる信仰であると認識していた。農村経済が絶えず発展し、生活の福利が絶えず改善するにつれ、多くの人は次第に考えを改めていった。例えば、天気予報を即時に把握するために、宗教徒の家にはラジオが購入設置され、生産の遅延を避けるため、農業の繁忙期には礼拝を中断し、病気の時にすぐさま服薬し病気を治療した、等である。

社会主義社会がもたらした幸福な生活を宗教徒が理解する時、彼らは往々にして独自の解釈を行う。すなわち、一部の人は人間の幸福を追求する中で、「神」の御心を探求していくのである。例えば、近年、党の宗教政策の全面的な施行にとともに、仏教や道教の有名な名山や寺院宮観は再び開放されて整備一新され、旅行者や参拝者は非常に多くなった。すると各地の宗教徒の間からは多くの異兆や瑞祥の伝説が流布され、国家や人民の安定は民心に適い、「神」の御心に順ずるものと宣伝された。ある場合には、各宗教の初期の神学思想に関係づけられた。宗教經典に根拠を求めながら、その固有の信仰や教義解釈は社会主義社会と一致すると解釈し、そうやってその実現のために努力奮闘していくとした。これもまさに宗教が社会主義社会と協調したという現象である。エンゲルスはかつて述べている。「キリスト教も労働者社会主義も、ともに将来的に奴役や貧困からの解放を広めるものである。キリスト教は死後の彼岸世界の生活の中で、天国でのこのような解脱を目指すものであり、社会主義はこの世界の中で、社会改造の中でこのような解脱を目指すものである。」（『原始キリスト教史によせて』『マルクス・エンゲルス全集』第二二卷、大月書店、一九七一年、四四五頁、

本訳文は筆者が中国語より翻訳した。この論述が我々に教えるのは、キリスト教の誕生は、被搾取者が解放されたいと思ふ願いを反映していたということである。まさにこれが、旧社会の多くの労働者が宗教を信仰した動機であつた。一方、今日に至つて、社会主義社会は現実の幸福のために輝かしい未来を開拓し、先人たちの念願を実現した。幸福という現実は、宗教が社会主義社会と協調するための堅実な基盤を築いた。三〇数年来、帝国主義者や国内の反動分子は有神論と無神論の対立を利用して、挑発や離間などの破壊工作を行つたが、多くの宗教徒における政治的、経済的な根本の利益と社会主義事業との合致は、様々な破壊工作の陰謀を最終的には挫折せしめた。

(二) 党と政府の側から述べれば、協調の基本的な前提条件は宗教信仰自由の政策を断固として施行することである。

建国以来、党と国家は、マルクスレーニン主義と毛沢東思想という科学的原理を堅持しながら、我が国の実際の状況を加味して宗教に関する一連の方針や政策を策定し、一貫して施行に努めてきた。これらの方針や政策は、次のものを含む。宗教信仰は総じて人民の内部思想意識の問題であると確定する、宗教信仰自由の政策を実行する、公民の信教の自由の権利を確実に保証する、行政命令あるいはその他の強制的手段を使って宗教を消滅するといふ誤つた考えや手法を断固として放棄する、宗教内の帝国主義やその他の反動的な政治勢力を一掃する、カトリックやプロテスタントが独立かつ自主的に、教会の反帝国主義愛国行動を行うことを支持する、仏教、道教、イスラム教が封建的搾取制度を排除するなどの民主改革を行うことを支持する、等である。

一九五七年以降、党の宗教政策の「左」化という過ちは次第に激化した。特に「文化大革命」の中で、林彪や江青といった反革命集団は、党の宗教問題についての適切な方針を完全に否定して、理論的にかつ實際的に宗教界が社会主義社会のために行つてきた努力を否定し、宗教を消滅する対象と定め、宗教と社会主義社会の軋轢を人為的に激化させた。党の第十一期三中全会以降、党中央は極左路線を修正し、宗教問題に対応する適切な方針や政策を重ねて表明し発展させた。ここでは次の点が強調された。現段階において、宗教信仰のある人々と宗教信仰のない人々の政治的、経済的な根本利益は一致する。思想や信仰の上での相違は重要な問題ではない。宗教信仰自由の政策を実施する目的は、全国の各民族人民（信教の群衆と不信教の群衆を含む）を團結させ、ともに社会主義現代化の強国の建設を目指すこととする。党と国家による以上のような各宗教政策の着実な施行にともない、多くの宗教徒は党の周りに緊密に團結し、四つの近代化（四化）実現のために奮闘している。

協調の根拠を研究すること、あるいは協調の前提条件を研究すること、これは単なる理論的問題ではなく、宗教信仰自由の政策の完全な施行に係り、宗教徒が社会に対して有益な影響を發揮するための現実的な問題である。いくつかの地域の実況の状況に関する調査に拠れば、宗教と社会主義社会の協調において、宗教は宗教徒に対し、社会に有益な影響を及ぼすよう促すことができる。このような影響は以下の五項目に帰納できる。

第一に、宗教信仰のある労働者や農民及び知識人は、工業や農業の生産の發展に尽力し、科学技術の水準を向上し、社会主義現代化の建設の新局面を築いている。

カトリック教徒が多く住む村落がある。信教の群衆は全村人口の七〇%を占める。彼らは農村經濟改革の中で積極的に協力して生産を發展させた。四年の期間で、個人の平均収入は五倍に増加した。ある信者は温室でのニラ栽培という自身の経験を広め、二〇〇軒近くをニラの専門農家とすることに尽力し、全村で売上高三〇数万元を成し遂げた。この村の信教の群衆と不信教の群衆は互いに協力して、それぞれの才能を發揮し、まさに二つの文明建設の中で手を携えて進んでいる。

浙江には、プロテスタントが比較的多く居住する県がある。ある県内の郷鎮には、信者が特に密集している。統計データから見れば、信者が多く居住する郷の生産状況は、その他の郷と比較して、全く遅れをとっていない。例えば、信者が多いある大隊の一九八三年の糧食苗生産量は全郷中第三位であり、個人平均収入では第一位である。ある郷の信者は全郷の総人口の一七・五%を占めるが、一九八三年のその郷の個人平均収入は城北の九つの郷鎮の中で第一位である。その郷の一つの村には七〇数軒の農家があり、その内、信者は六〇軒である。その村は各村との比較において、ブタの出荷量が第一位であり、個人平均収入は第二位である。その県にはプロテスタントの比率の高い郷鎮が九つあるが、一九八三年第三回刑事犯罪撲滅運動において逮捕及び捜査された人の中には一人の信者もいなかった。当地の幹部は、プロテスタントの信者が近隣団結、防潮堤の緊急工事などの各方面において相当な活躍を果たしたと述べた。これらから、宗教信仰は決して生産の發展の遅れや、社会不安などの状況を引き起こすものではないことが確認できる。なぜならば、信教の群衆は豊作と平安を望んで神靈に祈禱する一方で、党的確な政策と指導者の指導に依拠すべきであると同様に、さらに科学技術を身に着けつつ社会秩序を維持すべきであると理解している。彼らから見れば、党や政府及び自己の努力に依拠することと、神靈の加護を祈ることは、同時に行っても相反しないのである。

知識人や帰僑（華僑帰国者）、僑眷（華僑の中国国内の親族）、元商工業者の中でも、宗教徒の割合は一定数を占める。彼らは技術的な発明を行ったり、開発への資金援助を行ったり、投資を誘致するなど、各方面に多大な貢献をなしており、それは国内での活動においても、対外開放においても、四化建設を加速する中で無視できない勢力となっている。近年、多くの地方は信者を組織して、「四化のための服務經驗交流会」や「愛国愛教先進分子表彰大会」、「愛国愛教經驗交流会」などに参加し、さらに宗教界で愛国愛教の旗を掲げ、信者が四化のために積極的に協力することを推奨している。一九八五年の完全ではない統計によれば、上海市のカトリック教会では、各レベルの先進模範人物として計三五〇人ほどが名を連ね、上海市プロテスタント教会内では、各種の先進称号を計六一五人が獲得した。その中には、医師やエンジニア、教師、専門家、労働者、営業員及び主婦などがおり、それぞれ全国、市、区（局）、会社や工場の労働模範、先進工作者、三八紅旗手、五好家庭などの荣誉ある称号を獲得した。

信者の先進的な業績は、不信教の群衆のそれと同様に肯定、奨励され、宗教徒と社会主義社会との関係を実際的好かつ良好な協調関係の中においた。このことは、宗教徒の四化建設における貢献に拍車をかけた。宗教を信仰する上海の一人の通信エンジニアは、一〇年の動乱の中で深刻な被害に遭った。党の宗教政策や知識分子政策が安定した後、彼は仕事に復帰してまもなく、ある先進的設備を発明し、我が国の鉄道の通信性能を国際的にも先進的な地位に押し上げた。ある医師の信者は、国外で学術活動に参加した際、難病を患った一人の華人に対して、熱心に中医学、西医学の総合的な治療を施し、患者の寿命を延ばして大変な高評価を獲得した。帰国後には、得られた報奨金三万米ドルすべてを病院に寄付した。宗教を信仰する別の婦人科医は、月経困難症及び多毛症の治療法を初めて開発し、全国の無数の女性青年の苦痛や精神的負担を解放した。あるいは、電球工場で働く信教の女性エンジニアは、国際的に希少な先進的電極の研究開発に成功した。これらはすべて、信教の群衆が成し遂げた突出した成果である。

大量の事実が示すのは、宗教徒が愛国愛教の旗印のもとで發揮した愛国主義や社会主義への情熱は、非宗教徒の広大な群衆とともに、四つの現代化建設の潮流に合流することが可能であり、かつそれはすでに行われているということである。宗教徒の生活実践から見ても、「愛国」と「愛教」の統合は可能であり、宗教信仰は社会主義社会と互いに協調できることは明らかである。しかも、このような協調の環境下において、祖国建設、社会主義建設、そして素晴らしい人間社会の「天国」建設における宗教徒の積極性がもたらされたのである。

第二に、愛国主義という旗印のもとで宗教界が提唱したいくつかの思想信仰は、宗教徒に対して四化建設への参加を促す作用となった。

宗教は、長い歴史的発展の中で非常に複雑な思想内容を形成した。様々な宗教的思想は搾取制度擁護の謬論とも目されるが、同時に被搾取者の願望や要求を反映するものもある。歴史上の宗教の教義の中で、なにか奨励され、なにか忌避されたのか、これらは時代や社会の特徴を反映している。

解放以降、我が国の社会制度において起こった歴史変革や宗教界の三〇数年来の巨大な変化もまた、宗教の思想領域に影響している。マルクスやエンゲルスも述べている。「社会制度の巨大な変革が起きると、人々の観点や観念には変革が起こり得るのであるから、人々の宗教的観念にも変革が起こり得る」（『新ライン新聞、政治経済評論』の書評）『マルクス・エンゲルス全集』第七卷、大月書店、一九六一年、二〇七頁、本訳文は筆者が中国語から翻訳した）。ここでの「人々の観点や観念」には当然、非宗教徒の宗教に対する認識や、宗教徒の宗教思想を内包している。

三〇数年来の宗教徒の宗教的思想の変化として挙げられることは、積極的な姿勢で新中国の新たな光景を解釈し、帝国主義や国内反動勢力の転覆破壊活動といった謬論に反駁したことや、主に宗教徒に愛国と愛教が一致することを認識させることで、社会主義の新生活に積極的に参与せしめたことである。諸宗教の中の部分的な教義や思想が愛国主義思想と次第に協調していくことは、一連の段階として重要な意義を有する。当然、この中で重要な役割を担うのは愛国の宗教界の人々である。彼らは、多くの宗教徒が新社会を積極的に支持する姿勢を示したことを背景としつつ、元来の宗教教義の解釈の一部分が新たな状況に適応していないことに気づいて、「純正信仰」を掲げて、経典や教義を再検討し、社会主義社会に適応していない教義解釈の種々の観点を徐々に改めて、時代精神に適合する宗教思想を指し示した。

党の第十一期三中全会以降、宗教政策は次第に全面的な施行を遂げ、物質文明建設の中で始まった一連の新たな局面は宗教界の人々の愛国への情熱を鼓舞し、「愛国愛教」の思想もさらに体现、發揮された。

一九八三年は中国仏教協会成立三〇周年にあたり、趙朴初会長は『中国仏教協会三十年』という報告の中で、仏教徒に対して信仰の中に人間仏教の思想を樹立するよう呼びかけた。彼は「我々が人間仏教の思想を提唱するのは、五戒、十善を奉行して自己を浄化し、四摂、六度を広く修めて人々の利益に尽くすためであり」、「自覚的に人間浄土の実現を自己の責務とし、社会主義現代化の建設という莊嚴国土、利樂有情の崇高な事業のために自らの光と熱を捧げるべきだ」

と述べた。文中で「莊嚴国土、利樂有情」と述べるのは、広大なる仏教徒に積極的に祖国の四化建設に参与し、人民のために懸命に奉仕することを求めるものである。

プロテスタントの神学思想は近年、活気を取り戻す傾向にある。中国プロテスタント教会会長の丁光訓主教が、一九八四年に『金陵協和神学志』復刊号において発表した「在中国為基督做見証」の中で、神学理論から、中国の教徒が教会を独立自主させた経験を総括して、「中国の教会を中国自身の教会とすること、これはキリスト教徒が中国において人々と交際し交流するための前提条件であり」、「普遍性は民族性を通して実現する」と述べている。さらに、丁光訓は神学の側面から「愛国愛教」思想を検討して、人の「靈性生命あるいは超然性は決して無条件に良き地上の事業を否定するものではなく、我々が歴史に關与することを推奨するものである」と指摘した。

カトリック教団は一九八三年に「神学研究の進展(原文…開展神学研究)」という任務を提起した。愛国の神学家たちは神学が「ただ教会の判断のみによつて行われることはできず」、「聖書に依拠し、それを基準として信仰について解釈や議論を行つていくべきである」と考え、そこで、「中国の国情や人民大衆の利益に適合した中国カトリック神学」を提唱した。彼らは愛国主義という根本のもと、倫理神学の具体的な基準について新たな議論を行つて、「人民大衆の利益は我らと教会の行為の具体的な基準であり、かつ倫理神学の具体的な基準である」と指摘した。

イスラム教は、歴史において民族的な圧迫や搾取を受けてきたことにより、宗教布教の中で信教と不信教との間の區別を強調して、イスラム教徒の緊密な團結を推奨し、そのようにその他の民族や非教徒の迫害に対応してきた。現在、社会主義社会において各民族が和睦して過ごす中華大家族において、イマーム(イスラム教指導者)たちは説教の際、教徒に民族的團結を奨励することに重点を置き、「愛国は信仰の一部」(『聖訓・言行録』)であることを強調し、ともに社会主義の四つの現代化を建設している。

以上、これらすべての宗教思想の変化には共通した特徴がある。それは「愛国」と「愛教」を結合し、「現世」と「来世」の利益を結合したことである。したがって、これらの宗教思想は、宗教徒を行動させるための動機として大きな要素となった。一部の宗教徒は、「現在の信仰とは、今世に目標があれば、来世に希望があり、生きている間に懸命に働けば、死後には天国に行くことができるものだ」と言っている。当然、宗教界の愛国者がこのような「愛国愛教」という宗教思想を積極的に提唱したことは、旧来の宗教思想における一部の否定的な内容の影響を一定程度、削減することとなつ

た。

第三に、宗教道德の一部の内容は、宗教徒を棄惡従善に導くことで、社会の安定団結に寄与する。

宗教道德とは、宗教の形をとって現われる一種の人類の道德規範であり、これによって人々は信仰の外套という社会道德を身に着けた。宗教史から見れば、宗教道德の内容と形式は、両者ともに永劫不変のものではなく、異なる社会的需要に適應するため、それぞれの時代において、その具体的な内容には変化が生じた。旧社会において宗教道德が統治階級に利用されていた時、その否定的な要素はかつて主導的な地位を占めていた。しかし、社会主義社会の中では、宗教はもはや統治階級の反動勢力に従属するものではなく、統治階級のための道德的論証も行うことはなく、宗教の否定的な作用は消滅している。今日の一部の宗教道德の内容、例えば、不偷盜、不邪淫、不貪財、不妄語などは、信仰の群眾において、依然として罪の抑止という作用があり、實際的に社会主義社会の秩序の安定に利している。これも宗教が社会主義社会と協調可能であることの一つの側面である。

あらゆる宗教は善の追求を標榜し、「積善」を理想的天国に入るための必要条件としている。階級社会において、善は階級性を有するため、宗教道德が提唱する善も、同様に一定の階級の利益に隷属することとなる。社会主義時代においても、宗教道德は依然として宗教徒が善を行うことを推奨し、宗教界も積極的に社会のための善行を行っている。しかし、今日の宗教道德の善は、實質から見ても内容から見ても、昔とは異なる。現代の宗教道德の善惡観は、総じて人民大衆の善惡の基準と符合可能なものである。調査資料から見えるのは、この数年に宗教信仰を始めた人の中には、一〇年の動乱後の社会の道德状況に不満を持ったことによつて、却つて宗教道德に親しみを持ち、そこで宗教を信仰し始めた人が少なくない。一〇年の動乱の中で、宗教徒は暴動や略奪にはほとんど関わらず、一部の宗教徒は頑なに「偽証して人を陥れてはならない」という宗教的戒律を堅持し、自分が犠牲になったとしても他人を陥れることはなかった。宗教道德が提唱する謙虚、寛大、平等、博愛などは、しばしば信教の群衆が家庭や近所關係を調節したり、嫁姑、夫婦、兄弟、姉妹、相嫁などの揉め事を解決したりするための行為規範となった。

ある調査資料によれば、新疆南部には二つの村落があり、それぞれ九三%の成人がイスラム教を信仰している。二つの村の男性はほとんど酒を飲まず、およそ七九%は喫煙しない。これらのことにより、二つの村では泥酔による揉め事は発生したことがない。宗教政策が施行されて以降、二つの村の刑事事件は明らかに減少した。新疆西南部のタシユク

ルガン・タジク自治県では何年も殺人や放火、強姦、強盗などの大事件は発生したことがなく、泥棒やスリもほとんど発生していない。監獄には一人もおらず、看守の役人は臨時で転職せざるを得ない状況である。道の落とし物を拾って着服しない（路不拾遺）、金を拾っても自分のものとしめない（拾金不昧）というような安定的秩序が社会に根付いているのである。当地の人々は、これがムスリムの規範による制約と関係すると考えている。ここから見れば、宗教徒が居住する地域では、宗教道徳が社会道徳の改善に関して、一定の作用を發揮することができると言える。

社会主義社会は、旧社会から脱胎して生じた新しい形の社会である。社会主義社会における道徳倫理は総体であり、その構造は多層的である。その中の共產主義道徳は高階層のものであり、先進的な人々の行動規範であるが、その他にも、別の階層の道徳規範もあり、宗教徒の行為規範としての宗教道徳は、道徳倫理の総体を構成する一つの階層である。宗教徒の善行は、共產主義の道徳とは異なるとはいえ、社会の公共に反して私腹を肥やしたり、他人を損ねて自己の利益を図ったりするものではない。したがって、実際の社会生活から見れば、宗教道徳が宗教徒にもたらす社会に有益な作用は、人々から認められるものであろう。これは、まさに周恩来が生前のある談話の中で述べている通りである。「宗教は、その教義のある部分においては積極的な作用を有する。」（『周恩来統一戦線文集』、三一八頁）

第四に、宗教界は、公益事業を展開し、宗教文物の保護や宗教学術研究などに従事することで、社会主義社会の経済や文化事業の発展に寄与する。

社会主義建設事業の発展に伴い、宗教の教職員は、単に宗教活動や宗教産業だけに頼って生活していた過去の旧習慣を改め、積極的に社会主義の四化建設の中に身を投じた。

仏教や道教の多くの寺院や廟観は生産労働を展開している。いくつかの深山に位置する廟観は主に農業、林業、茶や薬材などの生産に携わり、多角的な経営を展開している。福建省の五〇箇所の仏教寺院の一九八三年における農副業の総収入はほぼ五三万元であり、僧尼の一人当たりの収入は四五〇元に達する。道教の四川省青城山常道観では、特産のキウイフルーツを使い、道家伝統の処方方で醸造した「洞天乳酒」が、すでに四川の名酒となっている。常道観は、さらに茶工場を開設して「洞天貢茶」を作ったり、飲料工場や漬物工場を開設したりして、観光客や社会に貢献している。その他、いくつかの名勝古跡の寺院では、観光客や参拝客が多いため、僧侶や道士たちは様々なサービシ業の労働に携わっている。例えば、仏教では、北京雍和宮や杭州靈隱寺、上海玉仏寺、龍華寺、道教では、茅山道院、千山無量観、

広州三元宮等がそれにあたる。毎年の収入のうち、僧道の生活や日常の出費を除く余剰の部分は、すべて寺廟の維持修繕に用いられている。その他のいくつかの廟観では、山林や土地がなく、参拝客や観光客も少ないため、主に手工業の労働に携わっている。例えば裁縫、編み物、宗教用品の作成などである。

ことわざに「天下の名山、僧、多きを占める」とあるように、仏教や道教の廟観の僧侶や道士は祖国の緑化に貢献してきた。福建省拓栄県福泉寺の僧は、年ごとに一千苗余りの植林をし、寺院の周囲は緑の海原となった。同省寧徳県金浪寺では、近年一二万株を植樹した。茶苗栽培の収入は、一九八一年には一万六千元であったが、一九八三年には三萬元に増加した。浙江省の天台国清寺の僧衆は緑化造林を専門とするグループを作った。新聞によれば、雲南省高黎貢山の一人の道士は数一〇年の間、僻地に身を置いて、貴重な名杉である杉五〇万株余りを育てた。彼は樹木の種を採取するため、しばしば危険を冒して崖や木に登った。近年、国家は祖国の緑化を推進しているが、彼は深山密林において、しばしば貴重な名材が盗伐されるということを知り、自らが古稀の年にもなることをも顧みず、自ら進んで鍋やおたま、布団などを背負い、ただ一人、密林に入って盗伐を見張った。老道士の行為は積徳という宗教的動機からくるものであるとはいえ、一般人には到底なし得ないような積極的な行動であり、間違いなく肯定されるべきものである。なぜならば、それは社会主義の四化建設にとって必要な要素だからである。

我が国の諸宗教は、すべて長い歴史を有する。したがって、現存のほとんどの廟観や教会は一定数の古代宗教の文物を所有する。例えば、全国各地にある仏教石窟像や道教宮觀壁画、仏教や道教の写経や経蔵などは、貴重なものとして国宝に指定されている。長い間、宗教文物は宗教界の人々のみによって保護されてきた。解放以降、国家の文物保管部署は重点宗教文物に対して適切かつ入念な保護を行った。一〇年の動乱の中では、僧道たちが一部の文物を必死に保護した。それらすべての宗教文物は、祖国の文化遺産の一部であるだけでなく、今もなお人々の精神生活の充実に寄与しており、さらに、愛国主義教育の促進という社会的な作用をも發揮している。

各宗教は、歴史的資料の整理、図書、典籍の収集、宗教図書や雑誌の出版などの活動を積極的に行っており、宗教研究の側面において多大な貢献をなしている。中国仏教協會の仏教図書文物館は、仏教典籍を一二万冊余り収蔵している。中国道教協會は研究室を設立して、道教の内修術を整理し、道教の養生、長寿、健康の方法を広め、道教の齋醮の儀式を整理、記録する映像を撮影した。前中国道教協會会長の陳櫻寧は、かつて次のように述べている。「氣功で病を治し、

動功で身を健やかにし、静功で性を養い、菓食で齢を延ばす。その他、深遠な内丹、外丹、老莊哲学なども含め、これらはすべて道教の学術である。そして、道教の精神はこれら学術の上に宿る。」「道教の学術が存在する限り、道教の精神もまたその上に宿って存在する。」党の第十一期三中全会以降、宗教政策は施行され、諸宗教はみな自らの刊行物を復刊、または創刊した。これらの刊行物は、各宗教の教義教理を広め、宗教徒の団結を促進したほか、大量な宗教文化遺産の収集整理ということにも役立つた。

第五に、宗教界の人々が海外の宗教界と交流することは、各国人民との友好や世界平和の維持を促進するための重要な要素となる。

宗教徒にとって宗教とは社交関係のかなめである。宗教とは一種の世界現象であるが、三〇数年来、我が国の宗教界の人々は、国際交流において我が国の対外関係を拡大し、我が国の人民と各国の人民の相互理解と友好を促進し、侵略戦争に反対して、世界平和の維持に積極的に貢献してきた。

建国最初期において、我が国の宗教界の人々はさまざま国際的な平和運動に参加し、多くの国際的な著名人との連携を実現して、世界各国の我が国に対する友好や理解を深めた。近年になって、我が国の宗教界の国際交流活動はさらに活発化している。

キリスト教（プロテスタント諸派）では、前後してイングランド国教会（聖公会）とスウェーデン国教会（信義会）の天主教、およびカナダやアメリカ等の国のキリスト教会連合会の代表団やアジア各国のキリスト教の領袖の来訪を受け入れた。ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカ、オセアニアなど、合わせて一〇余りの国家に代表団を派遣して、多くの国際キリスト教研究会に出席し、中国キリスト教徒の現状や、中国キリスト教神学思想の変化や発展を紹介した。イギリスのランシー大主教は来華の後、公開の集会において中国キリスト教の三自愛国運動が『聖書』に適い、国情に適うものだと称賛した。これらの交流は我が国の国際的影響力を拡大し、我が国の人民と世界各国の人民の友好を促進した。

我が国のカトリック教界は各国の大勢のカトリック教徒や何人かの枢機主教や主教を含む各レベルの神職者を招待し、我が国のカトリック教徒と各国のカトリック教界の友好を深め、国際カトリック教界の中の反中を堅持する少数派を孤立させることを後押しした。

古来より我が国と日本の仏教界は頻繁な友好的交流を続けており、中日両国の人民の友好や両国の国交正常化に大きな貢献を果してきた。一九八〇年春、唐代に東渡した高僧、鑑真像の中国への里帰り象徴となつて、中日仏教界の友好交流は再び盛り上がった。我が国の仏教界は日本仏教界の各宗派の人々の来訪を受け入れ、各宗派の祖師の記念法要や仏像の開眼法要等を行った。我が国の仏教界と東南アジアや欧米仏教界との交流や海外の華僑仏教界との関係も絶えず深化している。

イスラム教界では近年、相互往来交流の活動を通じて、アジアやアフリカのイスラム国家との関係を強めている。すでに国交がある、あるいは国交がない、国交があつても関係が薄い等、あらゆるイスラム国家と友好的な交流を行つて、我が国のイスラム教界は友好や相互理解においてその役割を果たしてきた。このような交流活動は、他の方法では代替の困難なものである。メッカの「聖地」巡礼はイスラム教の五行の一つであるが、『コーラン』によれば、「すべてのムスリムはみな兄弟」であつて、我が国のムスリムは巡礼の間、宗教的義務を果たしただけでなく、さらに各国のムスリムとの友好を深め、我が国の政策が宗教信仰において自由であるということを宣伝した。外国のイスラム教の多くの領袖は、「近年、中国国内の宗教生活が回復し、イスラム教が中国で再び盛行してきていることが確認できたことは、とても喜ばしい」などと述べている。

現在、全世界には二〇数億人の宗教徒がいる。彼らは常に宗教の状況を通じてそれぞれの国家の安定や繁栄を判断している。我が国の宗教界や宗教の具体的な状況は、国外の一部の人々が一貫して注目する側面である。多くの人々は、我が国の宗教徒の仕事や生活への理解を通じて、我が国の宗教信仰自由の政策を信頼し、我が国への信任と友好を深めてきた。このことは、宗教を通じて政治に浸透するという陰謀の実現を企んでいる国外の一部の反中勢力に対し、彼らを孤立させて大きな打撃を与えた。

我が国が建設事業を成し遂げるために必要なのは、平和な国際環境である。平和な国際環境は世界各国の人民にとつても必要である。戦争に反対し、平和を主張することは、大多数の宗教徒の信奉する宗教の教えの内容である。「平和」とは全世界数一〇億人の宗教徒の共通言語と言える。近年、我が国の宗教界は、世界平和を守る国際運動に積極的に参加している。仏教やキリスト教、イスラム教の人々は、アメリカとケニアがそれぞれ招集開催した第三、第四回の「世界宗教者平和会議」に出席し、各宗教界の人々は、「アジア宗教徒平和会議」にも出席した。中国仏教協会会長の趙朴

初は一九八五年に日本の「庭野平和賞」受賞の榮譽に浴した。これらのことは、我が国の宗教者の世界平和運動への貢献が、すでに国際的な公認を得られたことを示している。

第三節 非協調的現象の不断なる克服

宗教と社会主義社会との協調は、段階的な過程である。建国初期から現在に至るまで、両者間には非協調と相互協調との歴史的な展開があった。社会主義社会自体が発展中の社会であるため、社会の政治や経済の状況の変化によって、絶えず新たな課題が出現した。さらに、宗教の変化は、往々にして社会の政治、経済の条件の発展よりも遅れる。このため、社会主義社会においては、宗教には事実上、社会に適応しないような様々な現象が、継続的に存在し得る。また、社会主義社会が変化する宗教にいかに対処するか、この事も理解と適応の過程である。まさに、非協調的現象にも、協調のための条件と同様に、それが存在する原因がある。非協調的現象の検討を通じて、我々は協調のための規律への理解を深めることができる。非協調的現象には目下、主に以下の二つの側面がある。

第一に、一部の伝統的宗教思想や戒律制度及び宗教活動は、一定の条件下において社会に悪影響を及ぼす。

いかなる宗教の思想や戒律及び儀式も、すべて長い間の発展を経て形成された歴史的遺産である。社会主義社会となつて以降、この遺産のうち、その一部は放棄され、一部の新たな内容が付加された。しかし、短期間のうちには、決して伝統的な宗教思想や戒律、儀式のすべてに対して、新しい解釈と説明を加えることはできない。あるいはもし、すでに新たな解釈を行っていたとしても、伝播の速度や地域、及び人的な制約により、すべての宗教徒一人一人の心の中に浸透することはできない。したがって、伝統的な宗教遺産における一部の悪影響を及ぼすような教義等は、必然的に一部の宗教徒に影響を与え続ける。

例えば、教義思想の一部分は実質的に、旧世界の人々の現実の苦難に対する失望や抗議の反映であると同時に、社会に対する感情を抑圧し、麻痺させるものでもあって、麻酔のように作用する。長い間、宗教の消極的、厭世的な教えは、確かに少なからぬ害悪をもたらした。

改革解放後、「愛国愛教」や信仰が統合した生活等の新しい宗教思想の鼓舞のもと、多くの宗教徒は積極的に幸せな生活の実現のために奮闘した。ただし、このような伝統的な教義や思想は完全に除去することはできない。加えて、ほ

かに思惑のあるような人々が、個人の困窮や社会の動乱を利用して厭世思想を広め、二〇〇〇年にイエスが再来すると吹聴し、「主が現れるのを待つ」ことを信者に求めた。その結果、一部の信者は仕事に消極的となり、生活に怠惰となつて、社会主義建設や個人の生活に直接的に影響した。

ある青年労働者は、仏教に帰依した後、読経拜仏に専念して、必要な政治文化の各種の学習をなおざりにした。ある青年の女性農民に至つては、禁食やお祈りを行えば天国に行くことができると聞きつけて、飲食せずに一日中祈り、いかなる人の忠告も聞かなかつた結果、惨めに餓死してしまつた。

各宗教ではしばしば、その宗教への信仰の有無によつて、人と人との関係を判断して対応する。階級的対立や敵対関係が存在する社会において、宗教は信仰の有無を判断基準と見なすため、しばしば敵と味方の倒錯といった混乱が生ずる。中国では革命勝利の後、このような伝統的な教義や思想は、愛国の宗教界の人々により排斥された。とはいえ、その否定的な影響はなお一定程度、存在する。一部の人のよつてこのような謬論が喧伝され続けていることにより、物事の是非や善悪の判断もできない人が発生しているため、悪人に利用されやすい状況となつている。

また、文化水準が比較的低い、もしくは保守的思想を有するような一部の宗教徒は、科学的知識の欠如により超常現象を信奉する。彼らは往々にして病気に罹患したとき、医師を頼つて薬を服用するのではなく、神に祈りを捧げる。一部の新規の信者は、信教の動機がしばしば病気の治癒であつて、時には人命に関わるまで放置するような事態に見舞われている。その上、悪意のある人は、このような状況に付け込んで奇怪な話を捏造して人々を騙す。このような問題の根本的な解決のためには、人民の物質生活や文化水準の向上や、医薬衛生、保健事業の発展、及び科学的知識の教育を頻繁に実施することなどが必要である。

ある地方の僧尼は、寺院の建物の中に「線香の灰は薬として服用不可」と掲示し、僧尼自身が病気になると、医師を呼んで薬を服用した。これは正しい方法である。しかし、祈祷治療という旧慣習を改めるためにはさらに長い時間を要する。なぜならば、「奇跡とは超自然的方法を用いて人の願望を実現するもの」（フォイエルバッハの言葉）だからである。人々は大自然による制約を受け続ける限りにおいて、その願望は客観的に制限される。このため、人々は災害や死に振り回されるような運命に満足せず、神霊の奇跡に希望を寄せるのである。

さらに、一部の宗教徒は過度な宗教活動を行つて、社会秩序や生産秩序、生活秩序の妨げとなつている。個々の信者

は熱狂的な宗教的心理の支配下にあつて、宗教的經典の内容を曲解し、甚だしきは「子を殺し生け贄にして祭る（殺子献祭）」ことまで行つて、刑法罪を犯した。ある地域の某宗教では、封建的意識や伝統の影響が比較的濃厚である等の原因によつて、青少年に經典の誦誦を強制したり、宗教の名のもとで婚姻の自由に干渉したり、計画出産に反対したりする等の事態が発生した。当然、これらはすべて、諸宗教に普遍的に存在する現象ではない。これらの状況が出現する原因は、往々にして複雑である。しかもこれらの多くは、愛国護法の宗教徒の反対や抵抗を受けている。宗教を信仰することは公民の合法的権利であり、正常な宗教活動は国家の法律から保護を受けるものである。しかし、もし宗教活動が他人の心身の健康を侵害し、社会秩序を乱し、教育や司法に介入した場合には、法律が許容する範囲を逸脱している。これらは当然、法律によつて処分されるべきものである。

第二に、国内外の反動勢力は、実に様々な謀略により、幾度にもわたつて我が国の宗教を支配して利用しようとして、社会主義に対抗して違法活動を行い、社会秩序を破壊している。

宗教は歴史上、反動統治階級が規制し利用してきた精神的手段であつた。解放以降、我が国の搾取の制度はすでに消滅し、搾取階級もすでに存在せず、大規模な階級対立はもはや発生し得ない。しかし、階級闘争は一定の範囲において依然として存在するため、階級闘争は宗教にもある程度、影響を与えた。

例えば、党の第十一期三中全会以降、我が国の宗教政策は刷新施行され、人民の宗教信仰の自由や民主的権利や諸宗教の正常な活動も回復することができた。ただし、外国の帝国主義や、我が国を敵視する反中勢力及び宗教団体は、我が国の対外開放実施という機会に乗じて、布教の名のもとに我が国に卑劣な政治的浸透を図つた。ある者は、さらに個別的思想の反動信者やその他の犯罪者と結託して、スパイや特務その他の反動活動を行った。一九七八年から「呼喊派」が我が国の浙江、福建一帯に浸透し、江西、河南などの内地にも拡大を続け、信者を籠絡して買収し、反共の流言を公に広め、意のままに中国共産党の指導者や社会主義制度を攻撃し、キリスト教の三自愛国運動を罵倒し、さらには集団で暴動を起こして、社会の安定や団結に対して深刻な被害をもたらした。これに対して、一九八四年、政府の関係部門は厳粛な措置を実施した。このような状況の根源には国際的な反中勢力が失敗に甘んじない姿勢がある。ただし、信者を含む広大な人民はすでに意識が向上しているため、彼らの陰謀は最終的には実現することはできない。

五〇年代初頭に我が国から撤退したいいくつかの派遣組織や宣教師のごく一部は、我が国の宗教徒の自主独立の信仰と

いう原則的立場を無視して、長年にわたって様々な手段により我が国の教会の制御を取り戻そうと企てている。

ほかに、国内の違法犯罪者たちは、一部地域において愛国教職員が欠如していることや、愛国宗教組織がお正常活動を回復していないことに乗じて、しばしば宗教を利用して金銭を詐取し、婦女を強姦し、他人の健康を害するなどした。彼らの活動は直接的に社会主義を破壊し、人民の利益を侵害する。このような違法活動の発生は、目下、我が国の人民の経済文化水準が遅れていることと一定の関係があるが、同時に、その時点でその地方の愛国宗教組織や宗教界の人々が正常な活動を回復させておらず、宗教を利用した違法活動に対して有効な制止の手段を取らなかつたことにも関係する。

以上に述べたいいくつかの非協調的現象は、二種類の異なる性質の対立をはらむため、我々は具体的な状況に応じて、それぞれに対処しなければならない。何らかの伝統的な宗教思想等の影響により発生した人民内部の対立的性質の非協調的現象に対しては、愛国主義教育を強化して、宗教界の愛国者が信者の群衆を非協調的現象の克服に導くよう、推奨していかなければならない。国内外の敵が宗教を利用して反動活動を行うことに対しては、一面では警告を続け、自覚的に阻止しなければならない。さらには、事実に基づきながら法律を基準にして、これらの反動活動に打撃を加えなければならぬ。それら宗教の名を借りて違法活動を行う人に対しては、もし刑法に触れているのであれば、宗教というカモフラージュを取り去って法で裁きを加えるべきである。惑わされた信者の人々に対しては、辛抱強く思想教育を施して、彼らの民族の自尊と愛国の意識を啓発していく必要がある。宗教界の人々に対しては、愛国護法を堅持し、教会が独立的、自主的に運営する道を確認として歩むよう導かなければならない。

これまで述べてきたように、「協調」とは双方向的なものである。宗教と社会主義社会とが互いに協調するためには、宗教は社会主義社会の発展に適応しなければならないが、社会もまた宗教を尊重し、客観的に、現実的に、そして適切に宗教に対処しなければならない。国家の関連部門の幹部についても、仮に宗教の存在を無視して、宗教信仰自由の政策を施行しないとすれば、やはり非協調的現象は発生するだろう。たとえば、憲法に反する処理を行って、人々の宗教信仰や正常な宗教活動に対して、行政命令等の強制手段を用いて種々の制限や干渉を行えば、信者の宗教感情を毀損するだけでなく、信者の四化建設への積極性をも損なうだろう。あるいは、宗教を利用した違法犯罪活動に対して打撃を加えなければ、それもまた四化建設の妨げとなる。

建国以来の宗教の変化や道のりが示すのは、協調とは長期間に及ぶ漸次的過程であるということである。この過程においては、宗教思想であれ、あるいは宗教団体や信者であれ、それらが社会主義社会に適應できるかどうかは、一面では宗教界の人々や信者の集団の共同の努力に依存するが、最終的には社会主義社会の發展という条件にかかっている。社会が混乱し、生活が切迫するような事態になれば、宗教も歪に發展し、宗教の反社会的な要素も容易に影響を及ぼしていく。我が国の經濟の日々の發展に伴って、人民の生活水準は絶えず向上しており、社会主義の人々が協調を志向するのは必然である。同時に、宗教はある種の意識の形態として、歴史の發展の中で相対的に独立性を有しているため、宗教が継承してきた伝統的遺産と、絶えず進歩する社会変革とが互いに適應することが、一度の努力で解決できるよう性質のものではないことを、我々は認識するだろう。したがって、絶えず非協調的現象を克服していくのは、長期間にわたる歴史的なプロセスなのである。

注

(1) 訳者注…ムハンマドのハディース(言行録)に記録があるとされる「愛国は信仰の一部」とは、松本ますみ「愛国は信仰の一部——回民のイスラーム近代主義——(中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための六〇章』、明石書店、二〇一二年、二四三頁)によれば、一九二〇年代末に中東から中国にもたらされたハディースに基づいた言葉であるが、コーランに国という単語は存在せず、したがって現在の考証では真正のハディースとは認められないという。松本氏はこの言葉が神秘主義者(スーフィー)の解釈から生まれた伝承であろうと推測している。

〈キーワード〉社会主義、中国、信仰、宗教、信仰の自由